

Lab News

テーマ:血液培養にて大腸菌が検出された

敗血症症例における臨床病理学的背景について

今回は、血液培養にて大腸菌が検出された症例 137 例(生存例 125 例、死亡例 12 例)の患者背景と臨床検査データとの関連性について報告します。

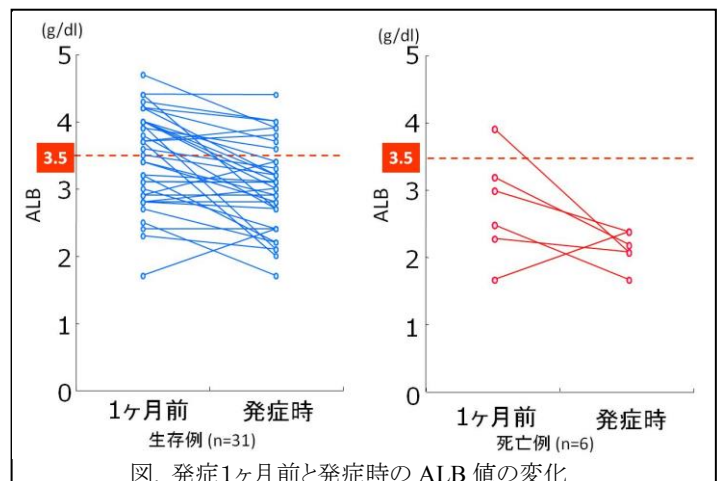
感染巣となる疾患で最も多かったのが腎盂腎炎48例(35.5%)、次いで部位不明の尿路感染症の32例(23.4%)、胆嚢炎/胆管炎が17例(12.5%)で、腎盂腎炎、部位不明の尿路感染では女性の比率が約80%と高率に認めました。年齢分布では、65歳以上の高齢者に多く認められました。

	生存例 (n=125)		死亡例 (n=12)		p値
	症例数	平均±SD	症例数	平均±SD	
ALB (g/dl)	125	3.3±0.6	12	2.2±0.5	p<0.0001
WBC (μl)	125	11136±6638	12	15695±11459	p<0.05
リンパ球数 (μl)	125	654±387	11	525±312	NS
CRP (mg/dl)	117	8.71±7.29	12	10.95±7.84	NS
血小板数 (万/μl)	125	17.2±10.5	12	11.4±9.1	NS
PCT (ng/ml)	100	12.881±23.496	11	25.379±38.113	NS

NS : Not significant

生存の有無で検査データの比較(表)をすると、生存例に比し、ALBは有意に低値(p<0.0001)を、白血球数は高値(p<0.05)を示しました。リンパ球数、CRP、血小板数、PCTでは有意差は認められませんでした。

また、発症1ヶ月前と発症時のALB値の変化を比較すると、1ヶ月前のALB 3.5g/dl以下の症例は、生存例30例中13例(43.0%)、死亡例6例中5例(83.0%)であり、死亡例で高率に認められました。症例数が少ない中での検討でありますので、症例数をかさね、今後も注目していきたいと思えます。



【まとめ】

1. 大腸菌性敗血症の感染巣は、腎・尿路系が約60%を占め、65歳以上の高齢者の女性に多く認められた。
2. 死亡例では、発症時のALB値が以下の症例が多く、発症前からの持続的なALB低値状態が考えられた。